

Title	一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン(III)
Sub Title	The function of Meidan in the 19th century Isfahan (III)
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.3 (1981. 12) ,p.43- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン(III)

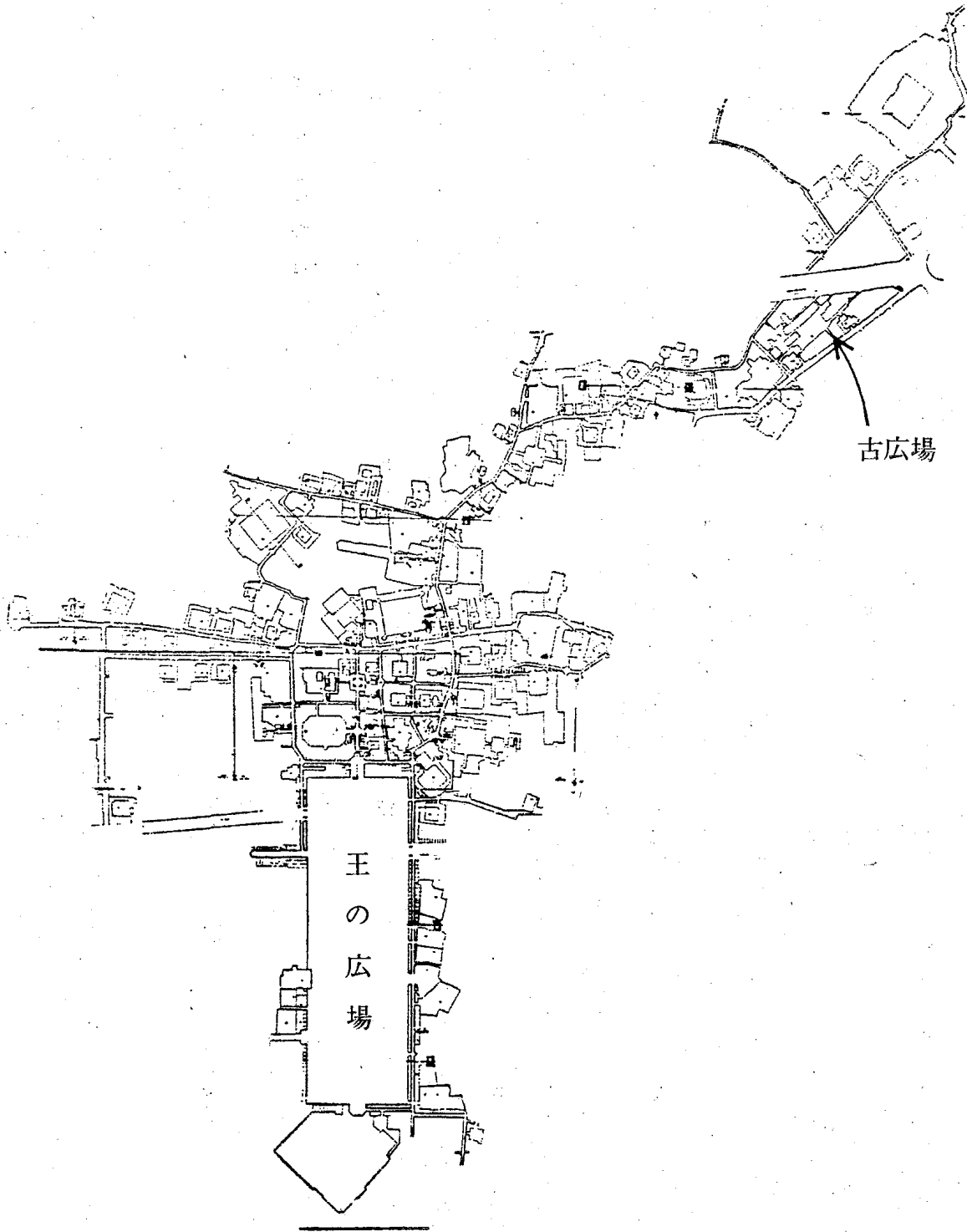
坂 本 勉

## 四 流通機構

一八七〇年代以降、イスファハーンの都市と農村は大きく変容した。前篇(I)、(II)で触れたように都市部(shahr, baladeh)では多くのマハッレが荒廃し、市街地の一部は復興しないまま農地化した。郡部(boluk)の農村ではムカーターと国有地払下げ政策とによって官僚、商人が私的土地所有を実現した。イスファハーンに人質として強制移住させられたバフテヤーリーの定住遊牧民のうち指導者の家族も地主化した。他方、本拠のバフテヤーリー遊牧社会でも政治的な統一が行なわれ、族長権(tikhani)が確立した。有力族長層は隣接した農業地域——チャハール・マハールとフーズスターンに進出、土地私有権を手にする者もあった。前者の地域の徴税、行政権はバフテヤーリー族に委ねられた。イスファハーンの都市社会はバフテヤーリー族との関係を密接なものにしていた。

以上のことを念頭におきながら一九世紀イスファハーンの流通問題について考えていく。NJ(四六頁)によると、所謂バザールと呼ばれるものは厳密にいうと二つの範疇に分けられていた。第一はマハッレごとに存在する「小バザール(bāzārcheh)」第二は「大バザール」であった。後者は正式には「公共の大バザールとカイサリーエ(Bāzār-e bozorg-e 'ām va Qaisariyeh)」と呼ばれた。「王の広場」の北から「古広場」まで延び、都市全体の流通のかなめを成していた(付図Ⅲ参照)。流通機構を理解するためには大小のバザールがもつ機能の差異を明らかにしていくことが必

付図Ⅲ イсфаハーンのバーザール全図



出所：Aii Bakhtiar, *The Royal Bazar of Isfahan, Iranian Studies* vol. VII. Part I.

要である。

(1) 小バーザール

イスファハーンの小バーザールはマハッレのものであったとはいえず、大都市のバーザールに匹敵する規模であったといふ。NJ(四九、五二―五三頁)は六つの小バーザールに関して名前と簡単な説明を与えている。まず、それを略述してみよう。

① Bāzār(che)-ye Chahārsū-ye Shirāzihā——Kheyābān-e Khoshk に沿って店舗が並ぶが、別の kheyābān にも店がある。屋根のないバーザールである。以上の二つの大通りに沿ってできたバーザールは、chahārsū(「十字路」)、「四辻」の意)でたがいに交差している。以前、この交差部分に gonbad(=「丸屋根」)の建物があったが、今は全く残っていない。

② Bāzārche-ye Bidābād——信頼のおけるバーザール。Bidābād のマハッレには三つの chahārsū がある。それは ④ Chahārsū 'Alī Qolī Āqā' ⑤ Chahārsū-ye Bidābād' ⑥ Chahārsū-ye Darsheikh である。このうち ④ はマハッレの中央にある。

③ Bāzārche-ye Dardasht——かなりの小バーザールである。

④ Bāzār(che)-ye Ghār——Golbār のマハッレの端にあり、Jūbāreh のマハッレに接している。この小バーザールは「古広場」<sup>メイダーン・コフネ</sup>の北側にある Bāzār-e Khorūji-ye Bazzāzhā-ye Meidān-e Kohneh に連らなり、大バーザールに つづいてゐる。Golbār のマハッレの端に Chahārsū Namakī がある。この他、名の知られていない chahārsū もある。

⑤ Bāzārche-ye Boland——Chahār Bāgh-e Kohneh に沿つてあるソルターニー学院に隣接している。二階建ての長いバーザールである。隣りに同名のキャラバンサライがある。現在、イスファハーン州知事の命令で改修され、奴隷

軍 (gholaman lashkar) の兵舎に使われている。

⑥ Bazarche-ye Chaharsu Naqashi—Khaju と Hasanabad の二つのマハッレの境界になっている道路が、小バーザールになっている。商人が事務所として使うキャラバンサライ (karavansara-ye tejirati) あらゆる種類の商品を並べる店がある。小バーザールの真中、中央にマルヤム・ビーク学院があり、その前に chaharsu がある。

さて、以上挙げた六つの小バーザールの位置を確認しておこう。前篇 (I) の付図 II によると、①の小バーザールは市街地の西端 N にあった。②の部分が chaharsu であった。②は西北の F にあった。③は北の B にあった。④は NJ の挙げる Golbar のマハッレが、サファヴィー朝の登記簿に記載されたものなので、はっきりと比定できないが、恐らく D、E の境界あたりにあったのであろう。⑤は付図 II の数字 ⑬の右に二軒の黒い建物があるが、その南側にあった小バーザールである。⑥は同じく付図 II の数字 ⑮の左にある道にあった小バーザールである。

JE (三〇頁) によると、イスファハーンにある小バーザールのうち NJ の挙げる①、②、③の三つだけが有力なバーザールであったという。その理由をとくに説明していないが、④、⑥は東北、および南から大バーザールに連らなっており、あえて小バーザールとみなす必要がないということかもしれない。⑤は奴隷軍、しかも前篇 (II) の⑥で説明したバフテヤリー遊牧民のその兵舎として使われていたので、事実上、小バーザールとして機能していなかった。有力な小バーザールである①、②がいずれもバフテヤリー遊牧民の住むマハッレ内にあり、町の西、ないし西北に位置していたことはきわめて興味あることである。

ところで、小バーザールの特徴を挙げるとすると、いかなることがいえるであろうか。NJ (五〇頁) のように小バーザールには純然たる宿泊機能だけを目的とした隊商宿 (karavansara-ye barandaz) 「ふぐだ小屋 (oshorkhan)」があったことを挙げることができるかもしれない。大バーザールには同じキャラバンサライでも後述するように卸売商人の事務所として使われるものが付属しており、これは大きな違いであった。しかし、⑥の例からも分る通り、小バーザール

でも卸売商人の事務所としてのキャラバンサライをもつことがあり、決定的な違いとはならなかった。

小バーザールの特徴を考えると、鍵となるのは①、②、④、⑥で出てきた *chaharsū* の存在である。そもそも *chaharsū* とは、道が交差してできる広い十字路、四辻 (*chahār samt, chahār rāh*) のことであった (N.J. 五二頁)。交差した部分の上には高い丸屋根の建物がつくられることが多かった。しばしば、*chaharsū* は *chaharsūq* (「四バーザール」の意) と混同されるが、これは間違いで、*chaharsū* のまわりにバーザールが自然に発達することはあっても、必ずそうあらねばならないということではなかった。<sup>(63)</sup>

N.J. は全部で一七例の *chaharsū* の名を列挙する。六例は大バーザールのアーケード内にあり、<sup>(64)</sup> 一一例は小バーザールにあった。大バーザールの *chaharsū* は取引の中心であることから機能的に後退しているが、小バーザールのそれは中心的な役割を負わされていた。もっとも、中心といっても *chaharsū* が必ず常に小バーザールの中央にあるというわけではなく、④の場合のように端にあることもあった。このような例は四つほどある。

小バーザールの *chaharsū* の機能についてイスファハーンの関係史料は全く沈黙している。しかし、C. J. Charpentier が一九七〇—七二年に調査したタシユクルガン (アフガニスタン) のバーザールからの類推によってかなりの程度、明らかにすることができるといえる。このバーザール内には *tim* という商業施設がある。これはバーザールの通廊が交差する十字路に位置し、*gonbad* に似た丸天井の建物になっている。

現在、この *tim* には米、帽子、靴の製造と販売をする55軒の店がある。*tim* 自体の所有権はカーブルに住むアジームなる人物の手にあり、店を出している商人、職人は毎月、30—50アフガーニーの賃借料を彼に払っている。この *tim* なる商業施設は歴史的にみると、必ずしも常設店舗の場ではなかった。一九世紀後半、ここを訪れた Yate は、*tim* が一種の *chaharsū* の体裁をなし、織物市がここで定期的に開かれていたことを伝えている。丸天井のちょうど真下には台が置かれ、両替屋がいた。店は定期市の日を除き閉められたといふ。<sup>(65)</sup> 以上から、イスファハーンのマハッレにあった小バー

ザールの *chaharsu* も同じように定期市の開かれる場所であったのではないかと推測される。後述するように①、②の小バザールでは毎日、果実、野菜の卸売市が立った。ただし、それが *chaharsu* において開かれたかどうかは明らかでない。

(2) キャラバンサライ

大バザールの構造と機能は小バザールのそれにくらべるとより複雑であった。大バザールを構成するものは、キャラバンサライ、常設店舗、メイダインなどであり、これらが一体となって流通を機能させていた。最初にキャラバンサライから取り上げることしよう。一九世紀イスファハーンには九五軒のキャラバンサライがあったが、そのうち一二軒は主要なキャラバンサライとして NJ (七四―七七頁) に記事がある。それらを整理して以下に掲げる。

① *Karavansarā-ye Tabatabā'i*——近年、イスファハーン出身の *tajer* である *Hajji Mir Mohammad Hosein Tabatabā'i* が建てた。以前、同じ場所にサファヴィー朝期に *Mokhes* という名のキャラバンサライが建設されたが、荒廃してしまった。*tajer* である *Tabatabā'i* が許可を得て解体し、設計を新しくして建直した。二階建てで、四つのイワンがあり、それらの両側にテラス (*mahabi*) がついていた。中庭をかこむようにして *hojreh* (「部屋」) があり、一階のそれは二階のよりも広く、*sandūqkhaneh* (「納戸」) と *bokhari* (「暖炉」) が付属していた。中庭からは二つの *dalan* (「通廊」) が二つの門に通じていた。中庭は石で舗装され、造園によって *chahār bāghcheh* (「四つの花壇」) がつくられていた。樹木が植えられ、中央に溜池 (*houz*) がつくられた。現在、*tajer* たちの事務所で、イスファハーンでもっともすぐれたキャラバンサライである。「王の広場」<sup>メーダーネ・シャー</sup>に近く、二つの主要な門のうち、北門は大バザールに面し、南門は大バザール内にある *Chaharsu-ye Mokhes* にたいして開いていた。

②+③ *Karavansarā-ye Nou va Monajjem*——この二つのキャラバンサライは互いに隣接している。ともに二階建てで、広い中庭がある。よく管理されていて、中程度の信用における *tajerneshin* がいた。

④ *Karavānsarā-ye Shāh*——大バーザールを構成するカイサリーエのバーザールにある。かたちが八角形という変形である。サファヴィー朝期に建てられ、今、*tajer* は使っていない。捺染職人 (*chitsaz*) と銀縫い師 (*naqdehsāz*) が工房として使っている。

⑤ *Karavānsarā-ye Mohammad Sādeq Khān*——ファトフ・アリー・シャーの時、サドレアザム・エスファハーニーの家臣 *Mohammad Sādeq Khān* が建設した。テラスのついた二階建てで、広い中庭がある。その真中に二つの池と二つの花壇がある。まわりの *hojreh* (「部屋」) はふつうのつくりであるが、数は多い。*tajerneshin* が使っていた。

⑥ *Sarā-ye Kūcheki (Sarā-ye Hajji 'Ali Naqi)*——⑤のキャラバンサライに向きあって建っている。小さい。建築主は *Hajji 'Ali Naqi* で、テラスのついた二階建てである。*tajerneshin* が使っていた。

⑦ *Sarā-ye Sarūtaqi*——バーザールからはずれている。サファヴィー朝のシャー・サフイーの宰相であったエテマード・ドウレが建てた。大きなキャラバンサライで *dehliz* (「入口の間」)、二つの *tincheh* がある。大きな中庭がある。一八世紀二〇年代のアフガン族の侵寇によって荒廃したが、最近、改修された。信用のおける *tajerneshin* がおり、その数はどのキャラバンサライよりも多い。

⑧ *Sarā-ye Fakhr*——二階建てで、ふつうの中庭がある。いくつかの *hojreh* (「部屋」) を *tajer* が使い、あとのいくつかを *bonakdar* が使っていた。

⑨ *Sarā-ye Golshan*——カリーム・ハーンの治世直前、イスファハーンの知事代理であった *Hajji Aqa Mohammad* がこのキャラバンサライを建てた。一階建てで、広い中庭と花壇がある。三つの門、二つの長い *dalan* (「通廊」) があり、この通廊に沿っても多数の *hojreh* (「部屋」) が並んでいる。これらの部屋を *tajer* と反物業者 (*bazzān*) が分けて使っている。中庭に面した大きな部屋は *tajerneshin* が使っている。このキャラバンサライは二番目に大きい。

⑩ *Sarā-ye Jarchi*——サファヴィー朝期に建てられた中規模のキャラバンサライである。二階建てで、信用のお



ける *tajer* が使っている。

⑩ *Karavānsarā-ye Hajji Karim* (→七六頁の付図Ⅳ参照) ——商人である *Hajji Karim* が最近建てた。テラスのついた二階建てである。四つの門と四つの *dalan* (「通廊」) がある。ひとつの通廊の真中に屋根をふいた *timcheh* がある。ここには *tājerneshin* がいる。通廊の両側は *hojreh* (「部屋」) になっている。 *tājerneshin* と *bonakdār* が分けて使っている。中庭に面した部屋も同様である。中庭の中央には池があり、四つの花壇がある。

⑪ *Karavānsarā-ye Tajār* ——二階建てで、広い中庭がある。 *hojreh* (「部屋」) は広くよい。ハマダーン出身の *tajer* がほとんどここにいる。

以上の一二軒のキャラバンサライのうち五軒が一九世紀以前に建設され、さらにその四軒までがサファヴィー朝期のものである。しかし、①、⑦のように建設時期がサファヴィー朝時代であったにもかかわらず、実際は荒廃して再建されたものもあり、その多くが一九世紀に建設されたと考えてよからう。建築主は判明するかぎりで *tajer* (①、⑪)、官僚 (⑤)、⑦) であった。

キャラバンサライの建築構造を一般的に述べながら、その機能に触れてみよう。まず、中庭 (*sahn*) があり、これを取り囲むようにして建物があった。ほとんど二階建てであるが、⑨のようにイスファハーン第二の規模のキャラバンサライであるにもかかわらず、平屋の場合があった。建物は各辺中央にイーワーンを配して飾ることもあった。①がその例であるが、このように規模の大きいキャラバンサライの場合にイーワーン形式が採用された。建物のかたちは方形が基本で、時には④のように八角形という変形のこともあった。これはサファヴィー朝期に好まれた建築プランである。中庭には一つ、ないし二つの池がつくられ、その周囲に一つ、ないし四つの花壇が造園された。中庭が石で舗装されることもあった。

建物は上、下階にわたっていくつかの *hojreh* (「部屋」) に区分されていた。これらが個人的所有にかかわる場合、賃貸に出された。イスファハーン州知事ゼッロール・ソルターンに医官として招かれた *Wills* は、①のキャラバンサライを

月二トマン（＝一八シリング）で借りたという。三つの部屋、召使い部屋、厨房からなっていた。彼はここに仮医院をつくり、週三回、診察にあたった。<sup>(66)</sup> テヘランの例を挙げよう。アミール・ネザームがバーザール内に建設したキャラバンサライは、全部で九六室からなり、全室の年間賃借料は二、四〇〇トマンであった。これから一室あたりの賃借料を割り出すと月二トマン強であった。このキャラバンサライはワクフ財産とされていたが、賃借料は管理人であるアミール・ネザーム未亡人と娘に納められた。<sup>(67)</sup>

hojreh を使う人たちは *tajer*, *tajerneshin*, *bonakdar*, 捺染職人、銀縫い師、反物業者であった。 *tajer*, *tajerneshin* は商人と訳すことができるが、遠隔地の国際貿易に従事する大商人のことであった。⑫の場合、*tajer* はハマダールの出身であった。キャラバンサライを利用する *tajer* は、このように地元の商人でなく、旅商であることがふつうであった。かれらは個々に *hojreh* を借り、仲買人 (*dallal*) からの情報を頼りに商業活動を行なった。 *hojreh* はその拠点であった。一般に二階の *hojreh* はテラスが張り出しているために一階より狭く、宿泊施設として利用された。一階は事務所用であった。このことは *sandūqkhaneh* (「納戸」) の存在が雄弁に物語っている。これは倉庫としての保管機能をもっていた。 *Wills* によると、一階の *hojreh* は低く重い扉で二つに仕切られ、中庭にたいして内側の部屋は貴重な商品を保管するところであったという。<sup>(68)</sup> イーラージ・アフンシャル氏はキャラバンサライを隊商宿 (*karavānsarā-ye barandāz*) と卸売商人の事務所 (*karavānsarā-ye tajerneshin*) の二種類に分けたが、<sup>(69)</sup> 大バーザールのものは後者の範疇に属するものであった。

キャラバンサライは、出身地、宗教、取引商品を同じくする *tajer* (「遠隔地商人」) が共同で賃借することがしばしば見られた。イスファハーンの場合、⑫の例しかないが、ケルマーンでは以下のように多数の例をみつけることができる。

- ① *Karavānsarā-ye Chaharsūg* (キリスト教徒の商人)。
- ② *Karavānsarā-ye Salikh Nazir* (ヤズド出身の商人)。
- ③ *Karavānsarā-ye Mirzā Hoseinkhān* (フアールス出身の商人)。
- ④ *Karavānsarā-ye Khorāsānihā* (ホラーサーン

出身の商人<sup>(70)</sup>。

ところで、*tajer, tajerneshin* とともにキャラバンサライを使う *bonakdar* とはいかなる人たちをいうのであろうか。かれらは⑧、⑩にみられるだけであるから数の上で *tajer* よりも少いことははっきりしている。しかし、かれらの性格を明らかにすることができれば、キャラバンサライの機能をより一層、はっきりさせることができるであろう。*bonakdar* という語はペルシャ語の現代語辞書の中に見つけることのできない言葉である。サイド・ナフィーシー、モイーン、デホダーなどの詳解辞典を検索すると、*bonakdar* とはチーズ、乾燥乳漿、油、米、豆などの食料品を倉庫に貯蔵しておき、後から販売する大商人 (*omdehforush*) という説明が与えられている。<sup>(71)</sup> イギリスの領事報告は *bonakdar* に “wholesale trader” という訳語を与えている。<sup>(72)</sup>

しかし、*bonakdar* の性格にもっともよい手がかりを与えてくれるのは J E (一一二頁) の簡単な記事である。それによると、*bonakdar* は重量の大きな荷 (*sanginbari*) を取扱い、キャラバンサライの *dalan* (「通廊」) で薬種、砂糖、野菜、その他の卸し商品 (*sagat bar*) を販売していた商人ということになる。詳解辞典の説明と取扱い品目に違いがあるが、この記事で貴重なのはキャラバンサライにおける *dalan* の機能が明確にされていることである。つまり、*dalan* とは *bonakdar* という商人が小売商にたいして商品を卸す場所であった。この点は⑨の *Karavansara-ye Hajji Karim* の付図 IV によって *dalan* の位置を確かめれば一層、はっきりする。*dalan* はキャラバンサライの中庭、その周囲にある *hojreh* と小売商の常設店舗をつなぐ「通廊」であった。

*dalan* は以上のような卸売機能をもっていたために、ここで取引のされるごとに税が徴収された。J E (一一二—一一三頁) によると、キャラバンサライ税 (*vojuh-e khabani*) なる税目が一九世紀のイスファハーンにはあったが、これは三つの税目にさらに分れていた。すなわち、キャラバンサライ所有税 (*maliyat-e karavansaradari*)、計量税 (*qapan-dari*)、そして乾燥果物、乾燥乳漿、羊毛(脂) (*pashm*)<sup>(74)</sup>、油、チーズなどに課せられる税である。最後の三番目の

税は *bonakdar* が取り扱う卸し商品にたいしてに他ならず、*dalan* で税が徴収されたのであろう。*dalan* がもつ重要性はキャラバンサライの管理人が *dalandar* と呼ばれているところにもあらわれている。<sup>(74)</sup>

*dalan* と同じような機能をもっていると思われるのが *timcheh* である。*timcheh* は、タシユクルガンのところで出てきた *tim* に縮小詞 *chēh* をつけた言葉である。機能において *tim* といかなる関係にあるのか、現在、はっきりしない。*tim* なる言葉は中央アジア、アフガニスタンで使われるのにたいし、イランではもっぱら *timcheh* が使われる。しかも、イランでは *timcheh* がキャラバンサライと全く同じものと考えられている。しかし、⑩の *Karavānsarā-ye Hāji Karim* ではキャラバンサライの *dalan* の一画に *timcheh* があり、しかも *tajer* がここにいらしている。だとすると、*timcheh* は必ずしもキャラバンサライそのものでなく、別な機能をもつもののように思われる。

ところで、*bonakdar* と *tajer* との違いは、結論的にいえば前者が地元の商圏に根をおろす卸売商人にたいして、後者が遠隔地商人ということになるうか。したがって、*bonakdar* は大きなキャラバンサライにいるより、小さなそれにより多くいたようである。NJ (七七頁) は、主要な一二のキャラバンサライのほか五つの小さいが信頼のおけるキャラバンサライを挙げている。それは、*Sarā-ye Mollābāshī*, *Mirzā Kūchek*, *Sefid*, *Mir Esmā'il*, *Shammā'ihā* である。これらのキャラバンサライには、商人が一人いるだけで、あとは *bonakdar* がいたという。*bonakdar* の近郊農村における活動は、果物の流通過程のところで触れることにする。

キャラバンサライは、本来、*tajer* と *bonakdar* が取引活動に利用する事務所であった。しかし、④、⑨のキャラバンサライのように捺染職人、銀縫い師が工房に使うこともあり、その機能は一九世紀後半に変わりつつあった。

### (3) 常設店舗とアスナーフ

J E 第一章第二〇節のタイトルは、「さまざまな人間 (*khālā'eq*) について」というものである。人間が一九九種の集団に分類され、一八七〇年代におけるイスファハーンの状況が具体的に誌されている。このうち第二二種から第一九三種

までは小売商、手工業者、行商人、運輸業など一七一の業種が扱われているが、その詳細は巻末の付表Ⅱの通りである。ところで、イスラム都市におけるバーザールの特徴は常設店舗が集合して、同じ業種ごとに一区画をつくることだと言われている。しかし、一九世紀のイスファハーンにおいてそのようなバーザールを構成していたのは僅かに一六業種だけであった。以下、それについてJ Eから紹介しておく。山でかこんだ数字は業種の番号である。

〈22〉カダク染物師 (*sabāgh-e qadak*)——アスナーフ (*asnāf* / *senf*) は大きい。以前、人数は多かったが、今は半減している。二つのバーザールが「王の広場」の近くにあり、店の数は一三六軒である。店はマハッレの小バーザールにもある。どの店にも親方 (*a'yan*) がいる。いくつかの店はアスナーフの長 (*ro'asā-ye senf*) に一、五〇〇トマン以上の税を払っている。他州では三、〇〇〇トマン以上支払っている。アスナーフの親方と知り合いの商人、官吏は、その店に立ち寄り、休み場所になっている (J E 九三頁)。

〈23〉菓子屋 (*qanād*)——人数は減少していて、アスナーフの活動はさかんでない。「王の広場」の近くに特別のバーザールがあり、店はマハッレにもある。ロシアの砂糖からつくる菓子は高級品だが、買手は少い。ふつうの砂糖からつくる中級品を農民、商人が買い求める。イスファハーンの棒砂糖 (*qand*) は、ロシア産の砂糖の輸入によってつくられなくなった。質が落ち、イスファハーンで消費されなくなったからである。糖果の一種ギヤズ (*gaz*) は、まだ廃れていず、相変わらず輸出されている。原産地は *Feridūn* の町と *Karvan* 郡の間にある *Dalānkūh* である。このものには *Khōnsār* *Golpāyegān* *Borūjerd* のものもかなわない。特別のギヤズ職人がいる (J E 九三頁)。

〈25〉捺染職人 (*chitsāz*)——以前、たくさんの人がこの仕事をしていたが、今は減少している。更紗 (*qalamkār, qalamzar*) をつくっていた。高価で質のよい *sadras* (♂) は買手がいないために廃れた。アスナーフがあり、四つのバーザールが「王の広場」の近くにある。五つのキャラバンサライ、チームチェがある。その一つが *Sarā-ye Shāh* である。二八四の店 (*dokkān*)、工房 (*hojreh*)、工場 (*kārkhāneh*) がある。捺染された更紗は、イラン各地で販売されて

いたが、ヨーロッパの綿布が入ってきてからバーザールは衰退し、その半分も残っていない (JE 九四頁)。

〈26〉レース職人 ('alageband) ——ひとつの特別のバーザールが「王の広場」の近くにあり、店はマハッレの小バーザールにもある (JE 九四頁)。

〈30〉鍛冶屋 (khaddad-e sagai va khaddad-e khorden) ——ひとつのアスナーフがある。ひとつのバーザールが「王の広場」のところにある。人数は減っていない。鉄の道具、はがねの鑄造を行なっている。犁、つるはし、犁の刃、まぐわ、手押車、三脚の五徳、やっこ、火鉢、釘、焼串をつくっている (JE 九五頁)。

〈40〉帽子づくり (kolahdüz) ——特別のバーザールが、「王の広場」の近くにあるが、不活発である。アスナーフは解体している (JE 九七頁)。

〈47〉鞍づくり (sarrāj) ——ひとつの特別のバーザールが「王の広場」の近くにある。人数は以前と大きな違いがない (JE 九八頁)。

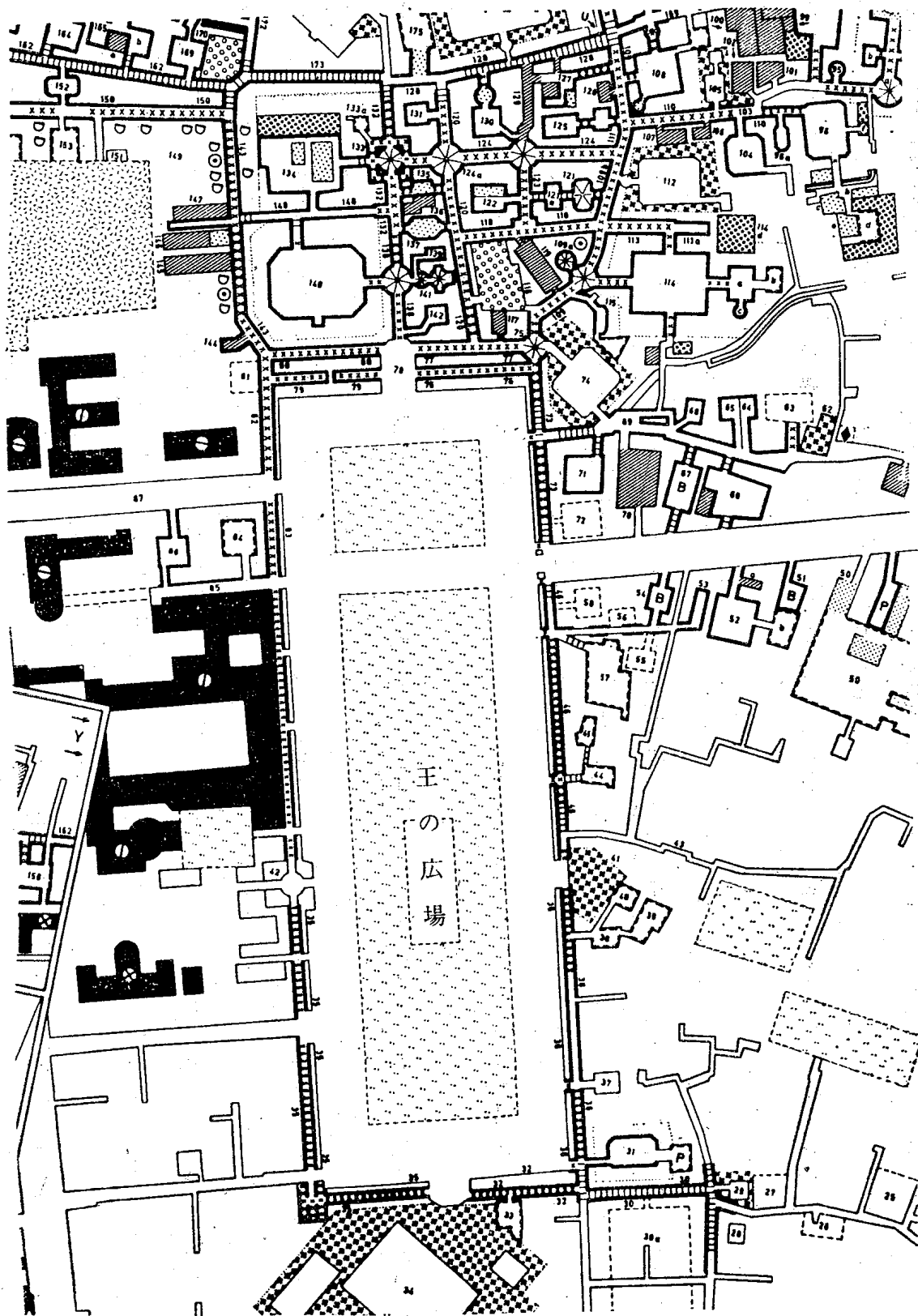
〈73〉巡礼衣づくり (ehrambaf) ——ヨーロッパの布、リンネルが入ってきて、バーザールは壊滅した。店は二軒だけになってしまった。浴衣をつくるようになったが、活動は停滞している (JE 一〇二—三頁)。

〈76〉両替商 (sarrāf) ——ひとつの組織 (tayefeh) に分れているが、二つとも人数が多い。ひとつの特別のバーザールが「王の広場」の北側のカイサリーエ門の近くにある。この他、店は「古広場」 Bridabad' Chaharsūqshiraziha の二つのマハッレの小バーザールにもある。大きなアスナーフであるが、半数の人がテヘラン、タブリーズに移住した (JE 一〇三頁)。

〈81〉穀物商 ('allaf) ——過去の飢饉の年に活況を呈したが、ここ数年、不振である。ひとつの長いバーザールが「王の広場」の近くにあり、店はマハッレにもある (JE 一〇四頁)。

〈86〉金細工師 (zargar) ——ひとつのバーザールが「王の広場」の近くにある。以前にくらべると人数は少なくなっている。

付図V 「<sup>メイダナー・シヤ</sup>王の広場」



出所：G. Gaube, E. Wirth, *Der Bazar von Isfahān*, Wiesbaden, 1978

る (J E 一〇四頁)。

〔92〕真鍮細工師 (dawâtgar) —— 人数は多い。かれらの仕事は発展している。昔も人数は多かった。特別のバーザールを「王の広場」の近くに持っている。サモワール、その他の容器をつくっている。他の国のものに遜色がない。需要が多く、イランの各州に送られる。

〔94〕針づくり (suzangar) —— 五軒の店が「王の広場」のカイサリーエ門の近くにある。針は市部と郡部で使われる (J E 一〇六頁)。

〔98〕銅細工師 (mesgar) —— 昔、人数は多かった。ひとつの特別のバーザールが「王の広場」の西側にある。その西端は Meidâne Chahar Houz の門に接している。今、人数は壊滅的である。数年前から綿作が栄んになり、村の農民は競って作付した。かれらは以前売り払った銅を買い戻した。これによって銅細工師は活気を取戻した (J E 一〇六—七頁)。

〔106〕鉄砲づくり (tofangsaz) —— 以前、鉄砲の製造は栄んであった。特別の大きなバーザールがある。ファトフ・アリー・シャールの時代、有名なホセイン親方がいた。かれらの腕は昔のロシアの有名な親方よりも良かった。イスファハーンの前知事 Hajji Seif ol-Douleh Soljan Mohammad Mirza のために鉄砲をつくったが、これは Hajji Mostafa のものよりすぐれていた。ホセイン親方の後を継ぐ弟子は、近年、そのほとんどがテヘランに移住した。しかし、工場に仕事がないため、修理の仕事をしている (J E 一〇八頁)。

〔142〕古着商 (kohnehforush) —— ひとつの特別のバーザールが「王の広場」の近くにある。また、多数の店が「古広場」の境内 (mohavvaieh) マハッレのバーザールにある (J E 一一四頁)。

以上挙げた一六業種のバーザールのうち一〇業種については、Wirth の精細なバーザール実態調査報告によって位置の比定が可能である。付図 V によって確かしてみよう。「王の広場」の北側、カイサリーエ門の前庭が [78] のところにある



が、その東に両替商〔76〕、菓子屋〔77〕のバーザールがあった。西に帽子づくり〔80〕のバーザールがあった。カイサリーエ門を北に入り、真直ぐ進むと〔132〕、〔133〕の二つの通りが交差する十字路につきあたる。これは Chahārsū-ye chitsāzhā (「捺染職人の十字路」) という丸いドーム状の建物である。ここで交差する〔132〕、〔133〕の通りに捺染職人は四つのバーザールをつくっていた。ここから目を東に転じると、金細工師のバーザール〔124〕、その南に鉄砲づくりのバーザール〔118〕があった。「王の広場」<sup>メイケーネ・シヤ</sup>に出ると、ロトフオッター寺院〔41〕のすぐ北に、鍛冶屋のバーザール〔46〕があった。これの斜め向い西北に銅細工師のバーザール〔85〕があった。これの北側に鞍づくり〔82〕、その延長線上にカダク染物師〔143〕のバーザールがあった。位置の比定が可能な一〇業種のバーザールは、「王の広場」<sup>メイケーネ・シヤ</sup>に近い地区にいずれも集中していた。

一七一業種のうち僅か一六業種しか集合的なバーザール区域をもたなかったということは、一九世紀のイスファハーンにおいて大バーザールの施設が荒廃化していたことを物語る。前篇〔I〕で触れたようにもともと、大バーザールの施設はハレーセ財産 (ragabeh) であった。しかし、一九世紀において長い間、荒れ果てたままであり、漸く、一八七〇年代になってイスファハーン州政庁知事ゼッロール・ソルターンの努力によって手工業者を誘致し、大バーザールの再建をはかったのである。

大バーザールの荒廃は、イスファハーンの伝統産業の全般的衰退に関係していた。岡崎正孝氏は、盛衰が明示されている六六の業種を分析し、一八七〇年代から八〇年代にかけての伝統産業の状態を次のように整理した。(i) 絹織物とその関連産業は、外国製繊維製品の輸入によって生じた消費者の趣向の変化、一八六四―六五年の病虫害、それにとまなう桑畑の減少によって、その衰退がもっとも激しかった。(ii) 綿織物関係、被服業も衰退した。これは、一八八〇年代末までには綿製品の輸入額が、総額の五八%も占めるようになり、かつ、マンチェスター産綿布の価格がイラン製の $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{3}$ と安価であったためである。(iii) 製靴業は新興業種としてのロシア靴を除き、いずれも衰えた。(iv) 建設業も衰退し、これに関連する

窯業部門も影響をうけた。(v)武器関係は軍事技術の変化と武器の需要地がテヘラン、タブリーズに移ったため衰退した。しかし、(vi)生活必需品の製造部門は従来と変わらず、古物商とアヘン煉り師は以前よりもかえって好況であった。<sup>(76)</sup>

さらに、岡崎氏はイスファハーンの基幹的綿織物業であったカダク織物の衰退にもなつて、その関連産業である紡糸業、梳綿業、カダク染め、捺染業、洗い張屋(晒し業)も没落したと説いた。確かにこれは事実である。しかし、前述のバーザールの在り方をみると、カダク染物師と捺染職人は衰えたりとはいへ、それぞれ一三六軒、二八四軒の店と工房を構えている。このことは、カダク織りという綿布をイスファハーンで織ることが少なくなったにもかかわらず、輸入綿布を代用して、二つの染色部門——カダク染めと捺染は、依然、主要なイスファハーンの手工業であったことを示している。JE(一一四頁)によると、更紗に陶砂をひいてつやを出す陶砂引き職人(mohrehkesh)のアスナーフが大きかったと伝えるが、これは捺染業がまだ健在であったことを裏づけるものであろう。

アスナーフはバーザールと並んで流通機構を支える手工業者、小売商の同職的団体であった。これがギルドであるかどうかは今、問わない<sup>(77)</sup>。JEは、一九世紀においても依然栄んなアスナーフとして次のものを挙げる。すなわち、ロシア靴づくり、袖なし外套づくり、旋盤細工師、錠前屋、乾燥果物屋、食料品商、ひよ子豆売りなど。しかし、伝統産業の全般的衰退のなかでこれらのアスナーフの隆昌は、むしろ例外的な現象であった。大部分のアスナーフは解体の方向に向っていた。バーザールのところで触れたアスナーフの他に、JEは次のものを衰退したアスナーフとして列挙する。すなわち、象眼細工師、刃物屋、製鋼工、絵師、製本屋、ブーツ職人、ギーヴェ(綿布)靴職人、搾油人、羊の頭足の料理人、チェロ、ポロなどを作る料理人である。

従来、イスファハーン州政庁は、アスナーフの長(rā'is-e senf' kadkhoda)を通じて小売商、手工業者から税を徴収していた。この具体的な徴税システムを十分に明らかにすることはできないが、その痕跡はJEに二例見つけることができる。第一は、カダク染物師のいくつかの店が、アスナーフの長老(rishsefid)に一、五〇〇トマン以上の税を支払っ

ていたという例である。<sup>(78)</sup> 第二は、アスナーフに加入する店の数が $\frac{1}{3}$ に減り、わずか三軒になってしまった搾油人 ('assār-e roughan) が、従来の額の税 (malīyat) を三軒で負担したという例である。<sup>(79)</sup>

アスナーフが解体すると、それを通じて税を收取することは不可能になった。イスファハーン州政庁はアスナーフに代る別な方法で税の收取を考えていかなければならなくなった。新しく創出された税として「機織税」(vojūh-e nassāji) の例を挙げよう。これはJE (一二二頁) によると、ザーヤンデルド河で洗いすすがれた染色後の綿布の量にたいして課税していくもので、「洗いすぎ税」(malīyat-e gāzori) とも呼ばれた。当時、洗い張り屋は二種あり、一つは、カダク染めの綿布を洗いすぐ人たちであった。あとひとつは、捺染業者の仕事場で働く職人 ('amaleh) が、捺染の終わった更紗の布をザーヤンデルドの河床で洗いすぐ場合であった。<sup>(80)</sup> イギリス領事 Preece の報告によると、洗いすぎの終わった河の水は赤く濁っていたという。<sup>(81)</sup>

アスナーフの解体しつつあった一九世紀後半のイスファハーンにおいて、アスナーフという流通機構を通じて税を收取する代りに、染色業にみられるように作業工程の最終段階をおさえて税を收取するという新しい事態が展開していた。

## 五 メイダーン

メイダーンとは広場のことである。広義には十字路とか四辻 (chahārsū, chahārrah) を指すこともあるが、ここでのメイダーンとは都市計画にしたがって人為的に建設された広場のことをいう。このような意味でのメイダーンがイスファハーンには四つあった。それは① Meidān-e Shāh (=Meidān-e Naqshejahan) ② Meidān-e Chahar Houz ③ Meidān-e Kohneh ④ Meidān-e Mir である (JE 一七頁)。

②のメイダーンはサファヴィー朝のシャー・アッバースによって建設された。「王の広場」<sup>メイダーン・シャー</sup>の西、宮廷の北に位置していた。このメイダーンのまわりには一階建ての兵舎が建っていた。三つの門があり、南門は宮廷にむかって開き、東門は

「王の広場」の西北にあった「銅細工師のバーザール」の西端につながっていた。北門はホスロー・アーカアのハンマームと相對していた（NJ四〇頁）。④のメイダンはチムールが建設したもので（JE一七頁）、その位置は④の「古広場」の東北隅にあった。現在はメイダンとしての面影をまったくとどめていず、Bāzār-e Meidān-e Mir と呼ばれて「古広場」の周辺バーザールの一つになっている。

②、④のメイダンは一九世紀において共にその存在が知られるだけで具体的な機能は分っていない。それ故、以下において①、③のメイダンを個々にとりあげ、その機能、性格を明らかにしていく。

(1) 「王の広場」とメイダンの一般的性格

このメイダンは縦横、それぞれ約五一二×一六〇メートルの矩形の広場である。周囲を多数の *hojreh*（「部屋」）からなる二階建ての建物がとり囲んでいた。外壁は漆喰であった。サファヴィー朝期において一階部分はバーザール、二階部分は親衛軍の兵舎になっていた。しかし、一九世紀初頭に Buckingham がイスファハーンを訪れたとき、建物の *hoj-reh* は荒廃して空き屋同然であった。

サファヴィー朝期においてメイダンは外交使節の謁見など政府の公式行事がとり行なわれる場所であった。騎兵のパレードもここで行なわれ、シャー・アッバースは西側のアリー・カプーの物見台からそれを観閲するのが常であった。ポロ競技もここで行なわれた。メイダンの端に石でつくられた頑丈なゴールが置かれていた。一九世紀の八〇年代、メイダンは練兵場として利用されていた。Stack によると、オーストリアの軍事顧問に指導されて近代化をはかりつつあった軍隊がここで訓練をうけていた。

メイダンはイスファハーン州政府によって刑場としても使われていた。メイダンの中央にレンガを積み重ねてつくった円形の塚があり、その上に絞首用に使う柱が立てられていた。テヘランのサブゼ・メイダン (Sabzeh Meidan) も刑場の機能を同じようにもたされていたが、面白いことにこのメイダンは聖なる公界にもなった。メイダンの中央

に「真珠の大砲」(Tūpe Morvārid)が据えつけられていて、罪人がひとたび、この砲身の下に身をおくと、罪を許されることになっていたといふ。<sup>(88)</sup>

広場が興行、演芸の場として使われることは一般に知られることだが、このメイダーンにも語り物師がやって来て、集って来る民衆に説話を語って聞かせた。Buckinghamは、このメイダーンにおいてナーディルシャーのバグダード遠征の話を朗誦する語り物師を目撃している。彼のまわりには三〇〇人も人垣ができ、話が終ると集った民衆は思い思いに金を投げ与えたといふ。また、語り物師から少し離れた所に、一〇〜一二才ほどの少年がひばりの鳴き声にも似た美声で歌をうたい、人を集めていた。<sup>(90)</sup>ルーティーは道化を演じ、レスラー(pahlavān, koshigar)は、自慢の力を披露した。<sup>(91)</sup>軽業、曲芸もここで行なわれた。このメイダーンは芸能にとってきわめて重要な場所であったが、祭礼にとってもここが中心であったことを指摘しておこう。ラクダの犠牲祭の折、マハッレを練り歩いてきた祭の行列は最後にこのメイダーンに集り、犠牲獣を屠ったのである(JE八八―八九頁)。

「王の広場」<sup>メイダーネ・シャー</sup>の一般的機能は以上の通りであった。しかし、流通との関連でいえば、メイダーンのもつ市場性の機能こそもっとも重要なものである。この点に関して、サファヴィー朝期にイスファハーンを訪れたシャルダンは、次のように伝えている。すなわち、公式の行事と祭礼が行われる時、人々はメイダーンからいなくなるが、それ以外の時、メイダーンは銅細工師、鍛冶屋、古着屋、行商人でいっぱいになる。数えきれないほどの小さな店が所狭しと並び、そこにはありとあらゆる生活必需品が揃っている。行商人はごさか絨緞を敷き、黒い羊の毛で編んだ布をその上に張る。夕方になると、露店を出していた人たちは品物を箱にしまい、小さな布をその上にかけてそのまま放置し、見張りもつけずにメイダーンから出ていったといふ。<sup>(92)</sup>

この記事はメイダーンがサファヴィー朝期において露天の市場の立つ典型的な場所であったことを示している。しかし、このような市場性はいつの時代にも同程度にみられたというわけではなかった。一九世紀の初頭、Ouseleyはこの

メイダーンで「卑しい商人」が日除けの天幕を張り、その下に品物を並べているのを目撃したが、それはかつてのにぎわいに到底、及ぶものではなかった。<sup>(93)</sup> 一九世紀においてもこのメイダーンは確かに市の立つところとして重要であった。しかし、イスファハーンにおいて真の市場性をもち合せていたのは、むしろ「古広場」<sup>メイダーン・コフネ</sup>の方であった。

## (2) 「古広場」の市場性

メイダーンが市場性をもつとき、それを利用するのは原則として常設店舗をもたない行商人とか露店商である。それ故、これらに属する人たちをJ Eの中から紹介することにする。

① (食料雑貨の) 行商人 (pilehvar) —— 薬種 (ashābe 'attari) 砂糖、茶、雑貨などをもって郡部の村々、遊牧民のところに行く (J E九五頁)。

② 既製服商 (dūfteforūsh) —— 郡部の農民は既製服を少ししか買わないので、カシユガイー族、クルド族の支族カールス (Karus) など遊牧民が得意先である (J E一一五頁)。

③ 反物行商人 (bazzāze dourehgard) —— 反物の行商をしている (J E九五頁)。

④ 水売り (saqqā) —— マハッレの小バーザール、小路には公衆の水飲み場 (saqqākhāneh) が氷とともに無数にあるにもかかわらず、行商人の水売りがバーザールには多い (J E一二〇頁)。

⑤ 茶の行商人 (chayforūsh-e dourehgard) —— イスファハーンには茶館 (qahvehkhāneh) が以前から普及していなかった。チャハールバーゲ・コフネの真中あたりに州政府が建てた茶館が唯一のものであった。数年前、飲茶の習慣が広まり、数軒の茶館が建てられたが、この町の人はそこで茶を飲むことを不快に思っている (J E一二〇頁)。

⑥ 水ぎせる売り (gharyānforūsh) —— 行商人の水ぎせる売りは、ハンマームの前、チャハール・バーゲの遊歩道、バーザールに多い (J E一二〇頁)。

⑦ レンズ豆の料理人・レンズ豆売り ('adaspaz va 'adasforūsh) —— レンズ豆は貧乏人にとって安くておいしいホレ

シユの材料。調理法は代々、一つの家に秘伝として伝えられている。この調理法を盗もうと思っても、誰もうまくできない。数年前、調理師の一人がテヘランに移住し、そこでこの料理をはじめた。この料理は寒い季節にはやる。かまで煮て、行商人が売って歩く（J E 二二〇頁）。

⑧ 盆に物を載せて売り歩く行商人 (*tabaq besar*) —— 食料品のほとんど、果物、穀物を頭に載せて売り歩く (J E 二二〇頁)。

⑨ 陶磁器の修理屋 (*kalvaband*) —— 店をかまえている人も、行商の人もある。欠けた陶器、磁器をくっつけて修理をする (J E 二二二頁)。

⑩ 露店商 (*besāndāz*) —— マハッレの小バーザールに店を出す者が多い (J E 一一一頁)。

以上挙げた行商人、露店商の諸形態を敢えて分類すれば次のようになる。すなわち、①、②、③は食料雑貨、衣料品を扱う行商人で、売り捌く先は都市近郊の郡部の村、遊牧民であった。これに対して④、⑤、⑥、⑦、⑧は最低限の生活に必要な「食」に関係し、行商の範囲はマハッレの小バーザール、小路に限られていた。⑨は修理をもっぱら行なうサーヴィス業関係の行商人、⑩はマハッレの小バーザールに店を出す露店商であった。

これらの行商人、露店商が「古広場」<sup>メイダーネ・コラネ</sup>と直接どのように関わったのか J E は何も語っていない。しかし、N J には「古広場」<sup>メイダーネ・コラネ</sup>の在り方が、かなり詳細に記述されており、これによってメイダーンが行商人、露店商にとってきわめて重要な場所であったことが分る。すなわち、一九世紀の「古広場」<sup>メイダーネ・コラネ</sup>は、その周囲に隊商宿 (*karavānsarā-ye bārandāz*)、馬、らば、らくだの家畜小屋があったが、メイダーン自体は三分割され、アミールに下賜されていたという。この分割がトユールの授与に代るような市場権の下賜であったのかどうか、詳しくは不明である。しかし、いずれにしろ、このメイダーンは三つの区画に分けられ、次のように利用されていた。

① 北区画 (*qef'eh-ye shomālī*) —— 果物の卸売市場が立つ場所 (*mahall-e forūsh-e mivehjan*) で、ここでハルボ

ゼ、ヘンドヴァーネ、野菜が取引された。この果物、野菜の卸売流通については次節で述べる。この北区画は附図VIの(360)マドラセ・カーセゲラーンの東北の部分を用いのである。

②中央区画 (qei'eh-ye miyān) ——ここは木の屋根でおおわれている。以下のようにさらに細分されている。①果物小売商の常設のバーザール。②鍛冶屋 (ahangari)、その他の小バーザール。③露店商 (besajandāz) が店を出す区域。週に三日、ここにさまざまなものが持ち込まれ、売買される。この区画の西側にナジャフアーバードのバーザールという矩形の市場がつけられて、その町の出身者が乾燥果物 (khoshkbar) を販売していた。まわりに両替屋の店があった。ナジャフアーバードのバーザールは付図VIの(366)に相当する。この中央区画は、メイダーンというものの木の屋根でおおわれ、さら地の空間ではもはやなくなっていたことに特徴がある。しかも、一九二〇年代まで(299)のぶどう商のバーザール (Bāzār-e angūrfroshhā) などがあつた区域に、レザー・シャールの新都市計画によって大通り (Kheyābān-e Jamāl od-Din 'Abd or-Razzāq) が東西に縦貫するようになり、メイダーンとしての面影は全くなかった。

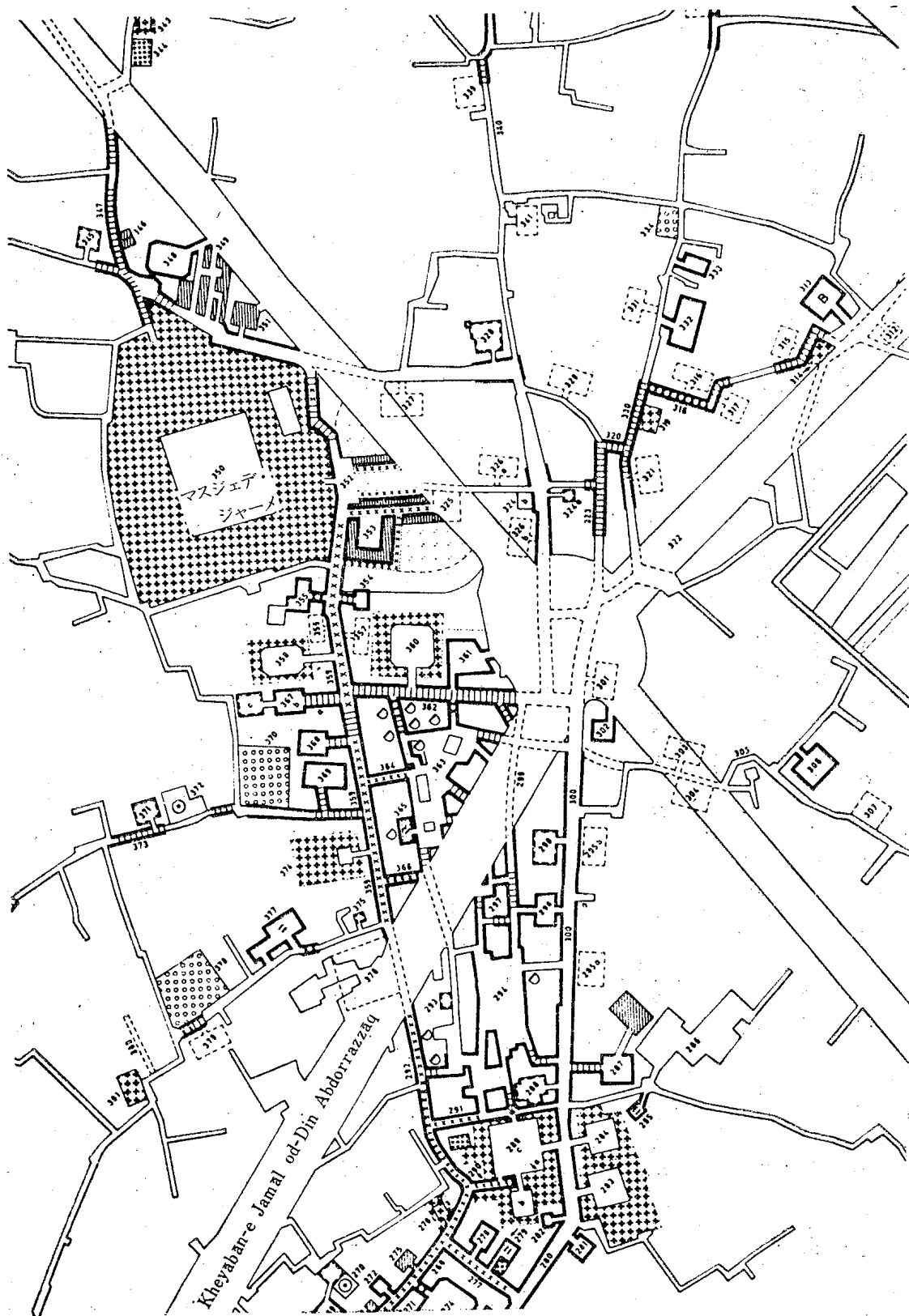
③南区画 (qei'eh-ye janūbi) ——(イ)中央区画に接する北側の場所は、乾燥果物屋と露店商の店が出ていた。(ロ)炭、材木、いぬふぐり (yushān) を販売する区域。(ハ)飼葉と炭を売る店。(ニ)いちばん南側の場所は、定期市が週に二、三回開かれた。この区域は附図VIによれば(294)のあたりを用いのである。

さて、以上の三区画それぞれの利用のされ方をみると、一九世紀後半において「古広場」の一部は常設のバーザール化が進行し、市としての機能がここで行なわれにくくなっていったことに気づく。しかし、それにもかかわらず「古広場」は有力な二つの小バーザール——Bidabad と Chaharsūqshirāzihā とともに、重要な定期市開催の場所であつた。JE は「定期市を巡回する行商人 (dastforush-e bāzārī-ye modāmi)」について次のように述べる (JFA 一一四頁)。

すなわち、水曜、金曜の二日間、「古広場」で定期市が開かれた。貧しい家の人々は、男でも女でも、こまごまとしたがるくたを使えるならば何でも持ってきて互いに取引した。そのなかには衣類、袋地、入れ物、道具、本などがあつ



メイダナー・コフネ  
付図VI 「古広場」



出所：G. Gaube, E. Wirth, *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden, 1978.

た。日曜にはアルメニア人地区のジョルフア広場 (Meidan-e Jolfa) でも市が立つので、若干のムスリムはアルメニア人の用に足りるようなものをもってそこに行った。<sup>(94)</sup> 市の立つ日以外、急に必要があって売らなければならぬ時は、バazaarの間を巡回する行商人に販売を委託するか、持主みずから Bidabad と Chaharsūqshirāzīha のマハッレに行き、その小バazaarに店を出し、売ったという (J E 一一四—一五頁)。

(3) 卸売市場と近郊農村

「古広場」<sup>メイダーン・コフネ</sup>の北区画は果物と野菜の卸売市場が開かれる場所であったが、一般にメイダーンは卸売市場開催の機能をもつことによって近郊農村につながっていた。<sup>(95)</sup> さて、果物と野菜の卸売市場は、イスファハーンの市部の四つの場所毎日、開催されていた。それは二つのメイダーン——「王の広場」<sup>メイダーン・シャール</sup> + 「古広場」<sup>メイダーン・コフネ</sup>——と二つの有力なマハッレ——Bidabad と Chaharsūqshirāzīha——の小バazaarにおいてであった。これらの卸売市場に近郊の村から毎日、果物と野菜が運びこまれ、それらは仲買人 (dallā) を通じて果物小売商 (mivehforūsh) と八百屋 (sabziforūsh) へ卸された。値段は品質と毎日の相場によって変った。卸売市場において徴税長官 (zābet-e koll) 書記 (nevisandehā) 監査官 (mobasherin) は一荷を単位に定額の果物税 (vojūh-e favāke) 野菜のバazaar税 (vojūh-e bāzār-e sabzi) を徴収していた (J E 一二四頁)。

農村と都市、生産地と消費地とのあいだの果物と野菜の流通機構を支配し、それに対して決定的な役割を演じていたのは、果物卸商 (toḥāf) である。J E (一〇四頁) は、短いながらもきわめて含蓄のある説明を与えている。それによると果物卸商 (toḥāf) は郊外の村にある果樹園を季節契約で借切り、みずから果樹園経営を行なった。収穫の時期になると、かれらは新鮮な果物を市場に卸した。いくらか質の落ちる果物は自分の倉庫 (anbar) に貯蔵しておいて、ノウルーズ後に売った。かれらはまた果物を乾燥させて、乾燥果物屋 (khoshkehbarforūsh) に卸した。果物卸商 (toḥāf) は bonakdar の一種であったという。これと同じような商人類型にテンサイ・ニンジン商 (choghondor va zardakforūsh)

がいた。かれらはハルバル単位で生のテンサイとニンジンを買付け、貯蔵した。売るときは一荷ごと、マン単位で売った。<sup>(96)</sup> 以上の記事から果物卸商 (toḥāf) の性格を考えてみよう。かれらは bonakdar であった。bonakdar の語源は、今、定かでないが、憶測するに bonak (＝「倉庫」) を持つもの (＝dar) の意であろう。だとすれば、果物卸売商は、bonakdar たるべき資格を十分に有している。かれらは、収穫の終わった果物をみずからの倉庫 (anbar) に貯蔵しておいて、時をみては卸売りにしていたからである。bonakdar の事務所は、キャラバンサライにあったが、果物卸商のそれもあるいは、そこにあつたかもしれない。

しかし、卸売りをする場所が bonakdar と果物卸商とはちがっていた。前者はチーズ、乾燥乳漿、油、米、豆、菓種、砂糖、野菜などをキャラバンサライの dālan (「通廊」) において卸していた。これに対して、後者の果物卸商は近郊農村にある賃借した果樹園から収穫した果物を何らかの運搬手段を講じて、卸売市場のある二つのメイダーンと二つのマハッレの小バーザールに運んだ。ここで仲買人を通じて果物小売商に卸したのである。

果物卸商が近郊の農村でどのような果樹園経営を行っていたのか具体的に明らかにすることはできないが、NJによって近郊農村の生産状況を試みることにしよう。

当時のイスファハーン州 (nāhiyeh) は行政上、州都であるイスファハーンの市部 (shahr) を中心に九の bolūk、八の mahall' 二の qasabeh、五の nāhiyeh-ye estelāhi から構成されていた。<sup>(97)</sup> bolūk と mahall' は「郡」に相当する。qasabeh は shahr よりも小さな「町」を意味し、それを核とした自治的な市町村単位のことをいう。イスファハーン市西北の Najafābād と南の Qomesheh (現在のシャーレザー市) がこれに該当した。最後の nāhiyeh-ye estelāhi は字義通り訳すと「名目上の州」という意味で、西北の Feridūn を中心とした五つの地区を指していた。行政的に独立性が強く、「特別州」的な地位を与えられていたのである。

果物、野菜の生産にとってもっとも重要な近郊地域は bolūk であった。バフテヤーリー族の遊牧地域に隣接する Cha-

hār Mahāl などの mahall は、小麦を中心とする穀物供給地域として一九世紀後半とくに、重要になってきたが、bolūk は市部 (shahr) にもっとも近く、それをとりまく真の近郊農村として果物、野菜、穀物、豆類、商品作物 (タバコ、ケシ、米)、乾果を供給する最大の生産地となっていた。N.J は bolūk について用水、土壤、作物状況、有名な村などの諸点を中心に記述しているが、今、果物、野菜の生産状況に重点を置いてそれらを抜き書きし、要約して紹介しておくことにしよう。<sup>(98)</sup>

(i) Jey bolūk——市部を東、北、南からとりかこんでいる。ザイヤンデルド河を挟んで、南北の両地区に分れる。北地区は果樹園が少く、もっぱら野菜を生産している。市部への最大の野菜供給地となっている。garmaki という品種のハルボゼ (メロン) は、以前、味のよいことで有名であったが、今はケン作が盛んになって少なくなってしまった。南地区は対照的に果樹園が多い。ジョルファのアルメニア人地区は行政上、ここに属する。あらゆる種類の果物が栽培されている。

(ii) Borkhār の bolūk——Jey の北地区に接する。果樹園はなく、ハルボゼ (メロン) を中心に野菜が栽培されている。Gorgāb 村のハルボゼは Latifi という品種で、イスファハーンでも第一級のメロンである。Gorgāb 村は最近開かれた村である。縦横それぞれ二ファルサフの小村である。年にハルボゼが約五〇〇ジャリーブ作付けられた。収穫されたものは六ヶ月間、倉庫に貯蔵されて、除々に売られていく。Zamanābad 村と Sim 村では、Mo'tamed od-Douleh Manū-chehrkhān が導入した新品種の種子を植付けて、ハルボゼを栽培している。

(iii) Marbin の bolūk——市部の西にある。縦横四ファルサフの広さである。bolūk の約 $\frac{3}{4}$ の土地が果樹園で占められ、主にぶどうが栽培されている。残りの $\frac{1}{4}$ の土地は畑地 (keshzār) で、米以外の穀物が作られていた。

(iv) Lanjān の bolūk——市部の西南にある。果樹園が多く、ぶどうが栽培されている。しかし、(iii) の Marbin のぶどうに及ばず、大部分が自家消費用である。約三六〇の村 (qaryeh) がある。大野盛雄氏が調査されたデヘーベヘジャット

アーバードもこの *boluk* にある。<sup>(88)</sup> 既に N J に名前が出ているから、この村の成立の歴史は一八八〇年代までさかのぼらせることができよう。この *boluk* は、ハルボゼ、ヘンドヴァーネ(すいか)の生産でも有名であったが、特に米の栽培で特筆されている。品種は大部分、*gerdeh* 種で、カスピ海南岸地域の *champa* 種は少い。この *boluk* は、イスファハーンの米の栽培を独占している。

(v) *Karvan* の *boluk*——市部の西北にある。この *boluk* だけ飛地のようになっていて、*Najafabad* の *qasabeh* の西にある。ただし、(iv) の *Lanjaan* の *boluk* とは南で地続きで接している。果樹園が多く、*'askari* 種のおどろが栽培されている。

(vi) *Kerarij* の *boluk*——市部の南にある。大部分が農地で果樹園は少い。穀物、豆類が中心である。

(vii) *Baraan* の *boluk*——市部の東南にある。穀作が中心である。

(viii) *Rudash* の *boluk*——(vii) のボルクの東南にある。穀作が中心であるが、ただ *Gavhvani* 村だけは糖果の原料になるギヤズをつくっていた。

(xi) *Qohab* の *boluk*——市部の東にある。穀作が中心である。米作も若干、行なわれている。

以上からイスファハーン近郊の *boluk* における生産状況のおおよその傾向を次のように言うことができる。すなわち、市部の東、東南、南の *boluk* は穀作に重点がおかれていた。これに対してザイヤンデルド河の北側の *boluk* は、ハルボゼ、ヘンドヴァーネなどの野菜を中心とする作付が中心であった。市部の西、西南の *boluk* はおどろを中心とする果物の一大供給地となっていた。ただ、*Lanjaan* の *boluk* だけは米作をもっぱら行なっていた。

イスファハーンの果物は良質なことで有名である。JE (五〇—一頁) によると、あんず、すもも、さくらんぼ、キュウリ、桑の実、つばいもも、桃、りんご、梨、黒さくらんぼ、イチジク、ザクロなどが一年のうち一〇ヶ月は出廻っていたという。なかでもおどろは質と量において秀れていた。その品種は一八種もあったという。このうち

askari 種は、小粒の白ぶどうで、食用の極上種であった。keshmeshi 種は淡黄色のぶどうで、乾ぶどうにされるか、ぶどう酒用に消費された。<sup>101</sup>ぶどうの価格は、一タブリーズマンが平均三シャヒーであった。消費時期は長く、ノウルーズのころから、年を越してハマル月の終りまで出廻った。<sup>101</sup>この間、ぶどうは倉庫に糸で吊り下げられて貯蔵されていた。最後に収穫の終わった果物、野菜を boluk からイスファハーン市内に輸送する流通過程の運輸業について触れておこう。J E (一一七頁) は nokari (駄獣による運輸業者) を二つに分け、第一のグループはらば曳き (qaterdar)、らば曳き (olaghdar) からなるという。両者はイスファハーン州の内外で運輸業に従事していたが、ただ、らば曳きは穀物、果物を零細商人 (khordehforushi) のためにろばに載せて運んでまわっていたというから果物卸商 (tohaf) bonakdar のような地元の大商人に備われて果物、野菜を運搬することはなかったと思われる。<sup>102</sup>事実、ろばは長距離輸送にはあまり使われなかった。第二のグループはらくだ曳き (shotrdar) で、boluk に多く市内には少いと誌されている。

らばとらくだによる輸送の他に、一九世紀のイスファハーンで顕著にみられた運搬の方法は J E (一一三頁) が詳述する tabaqkesh (＝「頭に盆を載せて運ぶ強力」) を使うものであった。かれらは首が太く、力の強い人たちで、盆を頭に載せて荷を運ぶ人夫 (hammali) であった。果物が熟す季節になると、大きな盆をもって町の郊外にある果樹園に行く。くわの実、あんず、桃、つばいもも、梨、ぶどうを上手に少しづつ盆に載せていったという。中に経験豊かな力持ち (pahlavan) がいて、くわの実を運ぶときには大きな盆を三つ重ねた。果樹園から市内に運び入れる時のやり方が、この pahlavan の場合、変っていた。三つ重ねた盆の一番上のそれに台を置き、子供をその上に座らせた。全体で七〇―八〇タブリーズ・マンの重さであった。盆のまわりをバラ、チューリップ、鏡、ランプで飾り、前に道化者を、後に多数のならず者 (awbash) を従え、バーザール、道々を練り歩き、果物小売商 (mivehforush) の店先に達した。かれらは、首を折ったり、身体を前にのめらせたりすることをめったにしなかったという。

tabaqkesh の記事のなかで後半の部分は、pahlavan ないしルーティーと運輸業との関係を暗示していて、きわめて

興味深い。しかし、これは多分に儀礼的、象徴的で、*tabaqkesh* による実際の果物運搬を示しているかどうか怪しい。しかし、らば、らくだと並んで以上のような人夫が果物を町の郊外——これは *boluk* の意にとるべきでなく、文字通りの郊外——から市内に運んでいたことは動かし難い事実である。

あと J E は、運輸業として *kerāyekesh* (賃ひき) と *hammal* (運搬人) を挙げる。前者はさまざまな荷物をバーザールと家へ駄獣で運ぶ運輸業者であり、<sup>(91)</sup> 後者は自分の肩 (*dush*) に商品をかつき、税関、倉庫、バーザールから荷物を運び出す人たちであった。<sup>(104)</sup> この二つは、もっぱら市内で運輸業を営んでいた人たちであろう。しかも、この二つの業種がイスファハーンに人質としてつれて来られた定住遊牧民の有力な仕事の一つであったことは、当時の流通を知る上で注目してよい。*kerāyekesh* (賃ひき) は古バフテヤーリー、*hammal* (運搬人) は新バフテヤーリーによって行なわれていた。なお、*mokāri* は同じ定住遊牧民のハルジ族が従事していた。

果物卸商、*bonakdār* はこれらの運輸業者を使って、一九世紀のイスファハーンにおける市内と近郊の流通を一手に握っていた。かれらは果樹園をも賃借してみずから生産と経営を行っていた。現代においてもこの種の商人は、以前ほどでないにしても依然として近郊農村と太いパイプでもってつながっている。一九世紀の米作の中心地であったイスファハーン西南のランジャー地方のデヘーベジャットアーバード村の農民が農産物をいかなる方法で販売しているか思い起してみるがいい。大野盛雄氏によれば、村民はバスを利用してイスファハーンのシャープール街に行き、ここに店を構えるボンガー (*bongāh*) に農産物を売り渡した。<sup>(105)</sup> ボンガーとは「倉庫を有する商人」の義、この商人こそまごうことなく一九世紀における *bonakdār* の現代の姿ではあるまいか。

## おわりに

イスラム都市をいかなる問題意識で、いかなる方法にもとづいて研究していくのか、これについて現在のところ一般的

に受け入れられるような共通の認識は必ずしも生れていない。基礎的な作業として地誌を精密に記述していくことは当然、必要である。さらに地区としてのマハッレ、職能集団としてのアスナーフを組織の面から追求していくことも欠かすことのできない研究の手續である。その際、何を対象に選ぶにしろ、都市を自己完結的な世界として取り上げるならば、それは静態的な「都市論」に終わってしまうであろう。

私は、イスファハーンの都市構成を独立した都市史の視点からよりも、むしろ、遊牧社会、農村をも包みこんだ地域史の枠組の中で述べてきたつもりである。史料的な制約もあって個々の実証において精粗に違いがあるが、私がとくに強調したかった論点は次の二つである。

まず第一に、イスファハーンの都市社会は遊牧民との関係を語ることなくして論じられないということである。部族政策から人質として連れてこられたバフテヤーリー以下のイラン系、トルコ系の遊牧民は、町の西、西北のマハッレに定住し、住民構成のかなりの部分を占めていた。かれらの従事した業種はさまざまであったが、各種の運輸業に従事する者も多く、イスファハーンの内外を結ぶ流通の輸送面は、かれらによって支えられていたといつてよいかもしれない。

第二に、バーザールに収斂する都市の流通過程をできるだけ農村との関係から説いていこうとするならば、メイダーンのもつ機能を落すことができないということである。メイダーンは、果物卸商が近郊農村で経営する果樹園の収穫物を卸売りする市場が開かれるところとして農村との直接的な結節点であった。しかも、メイダーンは行商人、露店商、一般民衆が定期市の場として利用していた。バーザールを構成する要素としてキャラバンサライ、常設店舗は確かに重要であるが、メイダーンは一般に解放された公共の市場空間として流通機構の核をなすものであった。都市の流通はバーザールに収斂するが、もっと端的にいえばメイダーンにこそ流通の諸機能が凝縮していると言えるのであるまいか。マハッレの小バーザールにあったチャハールスームメイダーンに匹敵する重要性をもっている。メイダーンには商業的な機能ばかりでなく、行政、宗教、芸能の諸機能が集中していた。メイダーンのもつ、一種の都市におけるシンボル性を明らかにしてい



くことが都市を理解して行くことにつながって行くように思われる。

(完)

註

- (62) 加賀谷寛「イラン立憲革命の性格について(続篇一)——イラン近代史とバクティヤリー族社会の変動——」(『東洋文化研究所紀要』第三九冊)、一八六—一九三頁。
- (63) Abū al-Qāsem Rafī'i Mehrābādī, *Āthar-e Mellīye Esfahān* (Tehran, 1352), p. 402. (以下、Āthar と略記)。
- (64) 大バーザール内にある六例は ① Chahārsū Shah ② Chahārsū Mokhes ③ Chahārsū Qaisariyeh ④ Bāzār-e Methqālīforūshā と Bāzār-e Zargarhā とが交差するところの Chahārsū ⑤ Chahārsū-ye Bāzār-e Chitsāzhā ⑥ Chahārsū-ye Emāmzādeh Esmā'īl と呼ぶ。
- (65) C. J. Charpentier, *Bāzār-e Tashqurgham—ethnographical studies in an Afghan traditional bazar*, Uppsala, 1972, pp. 57-58.
- (66) C. J. Wills, *Persia as It Is*. London, 1886, p. 182.
- (67) Persia: Report by Mr. Eastwick, Her Majesty's Secretary of Legation (AP30, 1862 LVIII), p. 71.
- (68) Wills, *op. cit.*, p. 190.
- (69) Irāj Afshār, *Yādgarhā-ye Yazd*, vol. 2, Tehran, 1354, pp. 767-68.
- (70) Abāmad 'Alī Khān Vazīrī, *Joghhrāfiyā-ye Kermān*, Tehran, 1353, p. 32.
- (71) Mohammad Mo'in, *Farhang-e Fārsī*, vol. I, Tehran, 2536, p. 591.
- (72) たゞし H. W. Maclean, Report on the Condition and Prospects of British Trade in Persia, London, 1904, p. 49.
- (73) 原文には yashm と shag' pashm の誤りがある。
- (74) JE 一一二頁。
- (75) H. Gaube, E. Wirth, *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden, 1978 を参照。
- (76) 岡崎正孝「一八七〇—一八八〇年代における 에스ファハーンの工業」(『足利惇氏博士喜寿記念オリエント学・インド学論集』図書刊行会、昭和五三年)、九一—一〇〇頁。
- (77) 坂本勉「近代イスラム・ギルドについての覚書」(『オリエント』21—2)の二七頁でギルドの定義について意見を述べたことがある。
- (78) JE 九三頁。
- (79) JE 九五—六頁。
- (80) JE 一七頁。
- (81) DCR No. 1376 (1892-94): Ispahan, p. 48.

- (82) G. N. Curzon, *Persia and the Persian Question*, vol. 2, 1966, p. 26.
- (83) 同上三十一—三八頁。
- (84) J. S. Buckingham, *Travels in Assyria, Media, and Persia*, London, 1829, vol. II, p. 359.
- (85) A・U・ホープ (石井昭訳) 『ペルシヤ建築』 (鹿島出版会、昭和56年) 一四五頁。
- (86) C. Williams, *Across Persia*, London, 1907, p. 281.
- (87) E. Stack, *Six Months in Persia*, London, 1882, vol. 2, p. 25.
- (88) J. A. Ussher, *A Journey from London to Persepolis*, London, 1865, p. 586.
- A. Arnold, *Through Persia by Caravan*, vol. 2, p. 25.
- Wills, *op. cit.*, p. 201.
- (89) Yahyā Dhakā', *Tārikhcheh-ye Sāhthemānhā-ye Arg-e Saliānati-ye Tehrān*, p. 40.
- (90) Buckingham, *op. cit.*, p. 359-61.
- (91) Ouseley, W., *Travels in Various Countries of the East*, London, 1819, vol. 1, p. 32.
- (92) Seyāhatnāmeḥ-ye Shārdān, *tarjomeh-ye Mohāmad 'Abbāsī*, vol. 8, Tehran, 1345, pp. 112-13.
- (93) Ouseley, *op. cit.*, p. 32.
- (94) ジョルファのメイダーンでムスリムの婦人は、綿糸を売って歩き、アルメニア人が編んだ靴下を代りに買い求めた。↓ C. J. Wills, *The Land of the Lion and the Sun*, London, 1891, p. 142.
- (95) Wills によると、王の広場では、毎朝、家畜市が開かれた。ヴァーンズベリによると王の広場の一隅は、週二回、ロバ商人の市場にあてられた。↓小林高四郎、杉本正年訳『ペルシヤ放浪記』(平凡社、昭和40年)、一〇八頁。
- (96) J E 一一四頁。
- (97) N J 一一頁。
- (98) N J 二九六—三二五頁。
- (99) 大野盛雄『ペルシヤの農村』(東大出版) 一九七一、一五四—二二九頁。
- (100) Wills, *op. cit.*, p. 158, 171.
- (101) J E 五〇—一一頁。
- (102) J E 一一二頁。
- (103) J E 一一三頁。
- (104) J E 一一七頁。
- (105) 大野、前掲書、一九四頁。
- 一九世紀イスファハーンの都市構成とメイダーン (Ⅲ)

付表Ⅱ—④ 19世紀イスファハーンの手工業

種	業種名	ペルシャ語	種	業種名	ペルシャ語
184	風呂屋・衣服預り, 三助, その他の風呂屋の従業員	ḥammāmi va jām-ehdār va darrāk va sāyer-e 'amalejāt	189	陶磁器の修理屋	kalvāband
185	くみ取屋	kannās	190	キャラバンサライの管理人	dālāndār
186	種拾い屋	tokhmehbarchīn	191	マスジェド・マドラセの召使い	khoddām-e masājed va madāres
187	人夫・建設工事者・その他	'amaleh va bannā'i va gheyrh	192	市民の奉公人	noukerhā-ye ahāli-ye balad
188	樵夫・きこり	hizomshekan	193	男女の奴隷	gholām va kaniz

史  
学  
五十一卷三号

付図Ⅳ Sarā-ye Hājji Karim

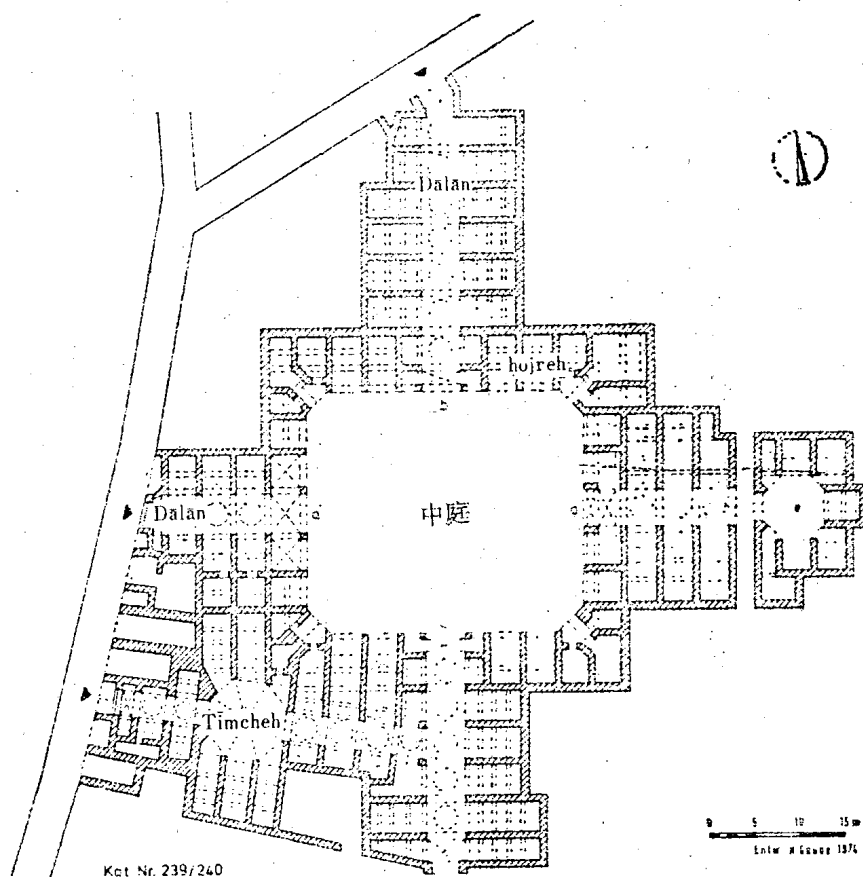


Fig. 62: Sarai - Hājji-Karim

出所: H. Gaube und E. Wirth, *Der Bazar von Isfahan*, Wiesbaden, 1978, p.208

七六

付表Ⅱ—③ 19世紀イスファハーンの手工業

種	業 種 名	ペルシャ語	種	業 種 名	ペルシャ語
130	写本彩飾師・金箔師	modhahheb	157	馱獸による運輸業者	mokāri
131	陶砂引き職人(つやだし)	mohrehkesh	158	洗い張り屋	gāzor
132	(頭に盆を載せて運ぶ)強力	ṭabaqkesh	159	粉屋	ṭaḥḥān
133	賃ひき	kerāyehkesh	160	糸染色師	ṣabāg-e rismān
134	旋盤細工師	charkhkesh	161	絹染色師	ṣabāg-e abrishom
135	(捺染用の)版木師	qālebtarāsh	162	なめし皮業者	dabāg
136	カットグラス商	bolūrforūsh	163	肉屋	qaṣāb
137	陶器商	chīnīforūsh	164	ロウソク製造人	shammā'i
138	果物屋	mīvehforūsh	165	(羊の)頭足の料理人・売り手	ravās
139	八百屋	sabzīforūsh	166	食料品商	baqqāl
140	テンサイ・ニンジン商	choghondar va zardakforūsh	167	パン屋	khabbāz
141	乾燥果物屋	khoshkehbar-forūsh	168	キャバーブ屋	kabābi
142	古着商	kohneforūsh	169	料理人	āshpaz
143	定期市を巡回する行商人	dastforūsh-e bāzārī-ye modāmi	170	ジュースしぼり	shirehpaz
144	ズック商	karbāsforūsh	171	ローストづくり	beryāni
145	タバコ商	tanbākūforūsh	172	小麦のひき割り と肉のかゆづくり	ḥalimpaz
146	アヘン商	teryākforūsh	173	レンズ豆の料理人・レンズ豆売り	'adaspaz va adasforūsh
147	本屋	ketābforūsh	174	プディング売り	ābband
148	絨毯商	farshforūsh	175	水運び人	saqqā'
149	既製服商	dūkhtehforūsh	176	水ぎせる売り	ghalyānforūsh
150	壺売り商人	kūzehforūsh	177	盆に物をいれて運ぶ行商人	ṭabaq be-sar
151	小間物屋	kharrāzīforūsh	178	茶の行商人	chāyforūsh-e dourehgerd
152	アヘン製造人	teryākmāl	179	ろば曳き	olāghdār
153	フェルト製造人	namadmāl	180	くず屋	'aṭṭā'i
154	日乾しレンガ製造人	kheshtmāl	181	(糸)車つむぎ	charkhtāb
155	仲買人	dallāl	182	糸撚り職人	mūtāb
156	運搬人	ḥammāl	183	腸線撚り職人	zehtāb

付表Ⅱ—② 19世紀イスファハーンの手工業

種	業 種 名	ペルシャ語	種	業 種 名	ペルシャ語
76	両替商	şarrāf	103	ボール紙職人	moqavvāsāz
77	製本屋	şaḥḥaf	104	刀鍛冶	shamsirsāz
78	綿打ち師	naddāf	105	短剣づくり	qammehsāz
79	荷ぐらづくり	akkāf	106	鉄砲づくり	tofangsāz
80	テントの綱づくり	lavvāf	107	銃の打ち金づくり	chakhmāqsāz
81	穀物商人	‘allāf	108	箱づくり	şandūqsāz
82	ギーヴェ(綿布)靴職人	reşāf	109	小箱づくり	mejrisāz
83	果物卸商	toḥāf	110	木箱づくり	qūṭisāz
84	蹄鉄工	na‘lband	111	ブリキ容器職人	ḥalabisāz
85	かかと革職人	na‘lichehgar	112	水ぎせるの管づくり	neypichsāz-e ghalyān
86	金細工師	zargar	113	鎖かたびら製造人	zarehsāz
87	浮彫り(打ち出し)細工師	naqqāsh-e zargar	114	兜, 甲冑づくり	kolākhod va chahārāinehsāz
88	ガラス吹き職人	sishehgar	115	弓(矢)職人	kamānsāz
89	製紙職人	kāghazgar	116	はさみ職人	qeichisāz
90	錠前屋	qoffgar	117	鏡づくり	āinehsāz
91	製鋼工	fūlādgār	118	かかとづくり	pāshnehsāz
92	真鍮細工師	davātgar	119	ナイフ職人	chāqūsāz
93	針づくり	sūzangar	120	(木工)象眼細工人	khātamsāz
94	刃物師	kārdgar	121	露店商	besāṭandāz
95	澱粉(のり?)づくり	neshāstehgar	122	精米屋	shālandāz
96	鋳物師	rikhtehgar	123	古物商	semsāl
97	かがる人	rofūgar	124	大工	najjār
98	銅細工師	mesgar	125	石工	ḥajjār
99	ブリキ職人	şaffār	126	卸売業者	bonakdār
100	浮彫り細工師	monabbatkār	127	建築家	me‘mār
101	彫琢師	sonbādehkār	128	れんが職人	bannā
102	練絹師	abrishomkār	129	絵師	naqqāsh

付表Ⅱ—① 19世紀イスファハーンの手工業

種	業 種 名	ペルシャ語	種	業 種 名	ペルシャ語
22	カダク染物師	ṣabāgh-e qadak	49	毛皮外套職人	pūstindūz
23	菓子屋	qanād	50	グルジャ靴職人	gorjidūz
24	薬種商	'aṭṭār	51	ロシア靴職人	orosidūz
25	捺染職人	chītsāz	52	皮靴職人	charmīdūz
26	レース職人	'alāqehband	53	ブーツ職人	chakmehdūz
27	れんが焼職人・ 窯工	fakhkhār	54	鯨皮靴職人	sāgherīdūz
28	反物業者	bazzāz	55	皮なめし職人	sāgherīchī
29	反物行商人	bazzāz-e dourehgerd	56	刺しゅう職人	naqshdūz
30	鍛冶屋	ḥaddād-e saqt va ḥaddād-e khordeh	57	十分の一刺しゅう 職人	dahyekdūz
31	(食料雑貨) 行 商人	pīlehvar	58	金銀飾り刺しゅう 職人	pūlakdūz
32	(ランプ油) 搾 油人	'assār-e roughan	59	花飾り職人	golchehdūz
33	ごま油づくり	'assār-e ardeh	60	セクメ縫い職人	sekmehdūz
34	ひよこまめ売り	ḥemmeṣī	61	天幕縫製職人	chādordūz
35	宝石彫刻師	ḥakkāk	62	繕い屋	pārehdūz
36	ろくろ工	kharāṭ	63	鞍づくり職人	sarrāj
37	銀糸づくり	sīmkesh	64	皮の樋づくり職 人	dalvdūz
38	金糸づくり	zarkesh	65	カダク織り職人	nassāj
39	錦織り師	zarībāft	66	絹織物師	sha'rbāf
40	モール刺しゅう 職人	golābetūndūz	67	チャドル織り職 人	chādrshabbāf
41	銀縫い師	naqdehdūz	68	メシュキー織り 職人	meshkibāf
42	かぎ針編み職人	qolābdūz	69	ジェハク織り職 人	jehakbāf
43	既製の仕立直 し屋	khayātbāzārī	70	ふち飾り織り職 人	zanjirehbāf
44	既製の裁縫師	bāzārīdūz	71	浴衣づくり	longbāf
45	毛織物の仕立屋	landarehdūz	72	(そでなし) 外 とう織り	'abābāf
46	帽子づくり	kolāhdūz	73	巡礼衣づくり	eḥrāmībāf
47	堅織りの仕立屋	golichehdūz	74	むしろ, ごぎ, マット織り	būryābāf
48	毛皮職人	khazdūz	75	かご編み	pīzorbāf